



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第8主日 C年(2022年2月27日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：シラ書 27章4—7節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 15章54—58節

福音朗読：ルカによる福音書 6章39—45節

## 言葉が心を語る

三つの朗読から

第一朗読には三つの比喩が登場します。「ふるい」(4節)、「陶工の器」(5節)、「樹木の手入れ」(6節)です。朗読全体が伝えたいのは7節の最後の言葉です。「語らいこそ、人を試す試金石だから」(7節 フランシスコ会訳)。人が語る言葉がその人そのものを表すというのです。伝えたい内容は実に単純です。誰でも分かっていることです。しかし、「ふるい」、「陶工の器」、そして「樹木の手入れ」と身近な事柄を使って比喩、つまり、たとえて語られると、じっくりと耳を傾けたくくなります。しかも、伝えたい内容が深くところに浸みるかのようです。たとえ話の効用はこんなところにあるのです。

第二朗読では最後の一文に注目しましょう。「主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」(58節)。キリスト信者として生きていくとは、復活された主イエス・キリストに強く結ばれて生きることです。起きているときも寝ているときも主イエス・キリストと結ばれて、主イエス・キリストのように生きることです。主は地上での生活をなさっているとき、苦勞を重ねました。誰も主の言葉に耳を傾けませんでした。誰も主のなさる不思議なわざが分かりませんでした。そして、十字架を担うという苦勞と十字架にかけられるという苦しみを体験なさいました。しかし、父なる神さまは、そんなイエスさまを死者の中から復活させてくださいました。主イエス・キリストに結ばれて生きるとは、今の苦勞や苦しみが決して無駄な骨折りに終わってしまわないという希望を抱いて生きることなのです。

福音朗読ですが、イエスさまはたとえ話を使ってお話しになっています。最後の45節にある「心」という言葉に注目しましょう。ここでは人間が語る言葉が生まれてくる根っ子のような意味で使われています。口から発せられる言葉はその人の内側を表しているのです。邪悪な人たちからは、よい言葉

は生まれてこないのです。

## 説教

「あの人は口さきだけで生きている」と批判されますが、口が達者な人は、言い方が上手で、よくしゃべります。しかし、言葉と行動にギャップがあることがよくあります。そうしますと、周りにいるわたしたちは、その人の話していることを信じてよいのか、その人の言っていることに信頼をおいてよいのか分からなくなります。結果的に不信感が募ります。「口さきだけの人」は「行動が軽い」、「八方美人」、「返事が軽い」という印象を受けます。場合によっては「見栄っ張り」、「嘘つき」という批判も生まれます。しかし、「口さきだけの人」にもそれなりの理由があるようです。相手に嫌われたくないからその場しのぎの対応になったり、本当のことを話したら相手を傷つけてしまうからオブラートにくるんだような言い方になったり、相手との間に気まずい沈黙を作りたくないからとにかく話したり、といった理由です。ですから「口さきだけ」の人は、とにかく話しているときは、話している内容は、その人にとっては真実であり、相手からどのように思われているかがとても気になって仕方がないのかもしれない。

口で語る事とところの中で考えていることが隔たっていることはよくある話しです。ですから、「口さきだけの人」を単純に批判はできないでしょう。わたしたちは多かれ少なかれ「口さきだけなのです」。ただ、人間はこころの中で考えていることにずっとフタをしてしまっておくことのできない生き物のようです。いづれどこかで自分の本当の気持ちを吐露する時があるのではないのでしょうか。人当たりがよく、ことば爽やかな人が、突然キツイことばを語りはじめたり、怒り始めたら、その人がこころの内側を表現しようとしているのだと思います。それではますます周りの人は当惑するばかりですが。

かつて、ある宣教師が、「日本人は口さきだけだ。本音と立て前がある。本音のところはわからない。」と批判していました。それを聴いて、わたしは悲しくなりました。60年間、日本で宣教して得られた結論が「日本人は本音と立て前で生きている」だけだとしたら、あまりにも寂しいからです。「神父さん、あなたも本音と立て前を生きてきたんじゃないの？ いい神父さんであるために、口さきだけで生きてきたんじゃないの？」と、それこそ自分のこころの内側にある感情をぶつけようとして、わたしはことばをグッと呑み込みました。

「人の口は、心からあふれ出ることを語る」(ルカ6章45節)。わたしたちのこころは邪悪なもので満ちています。わたしたちのこころは「悪いものを入れた倉」のようなものです。相手の気持ちを考えると言いながら、傷つくのをおそれるが故に「口さきだけの人」になっているのです。

しかし、こころのもっとも深いところに知恵があります。もっと深いところに神さまがおられるのです。こころの深いところから語ろうとすれば、真実を語るができるようになるのではないのでしょうか。真心をこめて語る人にさせていただきたいものです。そのためには真心を語ったイエスさまに結ばれて、イエスさまに生きていく必要があるのでしょうか。